

1 年学年通信

大学を知る・学部を知る②⑦ 先輩のいる大学⑬

島根県立大学

益田農林学校・松江女子専門学校を祖とする県立大学。
浜田・出雲・松江キャンパスがある。

●総合政策学部 学科定員 総合政策 220

幅広い視野を持ち、政策（行動プラン）を打ち出せる人材を育成する。

実践を重視したカリキュラムで、経済学・政治学・経営学・法学など、社会生活に不可欠な学問を身につける。

また、インターンシップやフィールドワークなどにより、学生の潜在能力を引き出していく。

カリキュラムは、グローバルコミュニケーション、総合教養、基盤、専門、総合化演習の5つの科目群で構成されている。学生は、国際関係プログラム、北東アジアプログラム、社会経済プログラム、地域政策プログラムの4つのプログラムから選択する。

●人間文化学部 学科定員 計 110 保育教育 40, 地域文化 70

幅広い知識と柔軟な思考力・判断力を持って、広く社会で役立つ実践力を備えた人材の育成、地域文化を生かしたまちづくりを目指す。保育教育学科は、乳幼児から小学校までの発達段階を見通した教育ができる高い専門性を持った人材を育成する。地域文化学科は、幅広い文化的教養と柔軟な思考力、判断力を持って、広く社会で役立つ実践力を備えた人材を育成する。

●看護栄養学部 学科定員 計 120 看護 80, 健康栄養 40

看護学科では、「看護を実践する能力」「相手を理解し協働する能力」「地域の特性と健康課題を探究する能力」の3つの能力を柱に、自ら考え行動できる、視野の広い専門職業人を育成する。

健康栄養学科では、看護師、保健師などの関連職種との連携を重視したカリキュラムを通じて、超高齢社会において必要とされる在宅栄養ケアの専門的な実践能力を身につける。

集団として生き延びていくために

鷲田清一元大阪大学総長は語る①

地域コミュニティの消滅、崩壊などと言われていますが、それは労働の形態そのものに原因があるんだと思っています。特に大企業で働いている人って、ある意味では毎日出稼ぎに出ているようなものでしょ。1・2時間かけて遠いところまで

地域文化の発見継承再生に取り組む

行って、帰っても寝るだけ。地域から完全に遊離した存在じゃないですか。地域の行事にかかわるわけでもないし、隣の家の普請の手伝いをするわけでもないし。よその介護や子育てを手伝ってあげるわけでも、魚のさばき方を魚屋行って教わってるわけでもない。まったく自分の住んでいるところと日々の労働は無関係ですよ。

企業活動と地域の活動というのが、一体どころか、まったく別物になっている。

ところが本来、企業活動ってのは共同体を支えるためにあったわけです。経世済民（けいせいさいみん）という言葉がまさにそうです。世を治めて民を救う。これは要するに、みんなに働き口を見つけて、災害があったり、いろんな動乱があったりしたときには、きっちりとそれを収め、集団として地域の人がたしかに生き延びていくための営みであったということです。明治時代初期の資本主義経営者は、基本的にその経世済民という意識があった。企業が公器であるというのは当たり前のこと、みんなのためにあるのが当たり前のことだったんですよ。だから、そのあたりから考えないといけない。

そもそも経済活動とは？

翻って今の企業活動ってのは、ホントに経済活動と呼んでいいのだろうか。私腹を肥やす、一部の人のための活動になっていないか。出資者に利益を還元しつつ、自分たちは一定の額をしっかりとるという、極めてプライベートな、経世済民と難の関係もない仕事の形になってますよね。働き口どころか、この私存在の利益のために、むしろ働き口をそいでいくという…。で、もっと労賃の安いこの地域外の人に、できれば外国の人に働いて貰うわけです。コミュニティの問題と経済活動が完全に切れてしまっているわけです。

コミュニティの力というのは、命に近い仕事ほど金がかからない。要するに、いいコミュニティでは消費活動が占める割合が極めて少ない。いいコミュニティでは「隣の屋根の瓦の付け替えするからちょっと手伝って」「子どもたちのこと見てもらえへんやろか」「防火用水のとこポーフラわいてるから替えなあかんあ」とか、こういうやりとりがサービスとしてではなく、日常にある。福祉のサービスを、お金で買うという形を取らず、「手でやりあう。」それが本来のコミュニティというものだと思う。だからいいコミュニティでは、一人がいろんな役を果たせる。サラリーマンだとお金を稼いでくるだけじゃないですか。地域にとっては、ただそれだけの人。しかも個人



の家庭、プライベートな家庭のために。けれどコミュニティというのはいろんな仕事を複数やる。そうすると皆関わる人が違ってくる。いっぱい仕事があるというのは、ネットワークが輪轉しているってことですよね。複業という考え方です。副業ではなくて。

以前その考えを、法政大学総長の田中優子先生に話したら、「何言ってるの、そんな昔から当たり前じゃないの。江戸時代は朝豆腐を売り昼から障子張り、晩は露店を出す、一人でいくつもの商いをしてたのよ。」と。生業がいっぱいあったのは当たり前やったんですね。よく考えたら、会社勤めという形で労働を考えると一つしかないけれど、地域での仕事として考えたら、実際みんな複業をやってきたわけです。

町方に対しての「地方」（じかた）

そんな中で、複業がだんだん単業になっていくんですよね。それは通勤というカタチに、つまり職住一致じゃなくて、働く場所が都会の離れたところの工場群やオフィス群になったというのが一つ。もう一つは、歴史的にみたら郊外、農村が単業化していった。

むかしの農村というのは「百姓」さんという言葉の通り、それこそ100の仕事があったわけです。米を作るだけじゃなくて麦も作るし蚕も育てるし桑も作るし、鶏も育てるし、それをさばいて売りもする。家畜から牛乳もとるし、隣の茶畑手伝いにも行くし、オフのシーズンだったら出稼ぎにも行く。農具も作るしでそれこそ無数に仕事があった。基本的には、農村が生産業で、町は流通の世界だった。村で作ったものを町に持って行き、町で流通しているもの、つまり地産でないものを買って帰る。町と農村はこうした循環関係にあったのですね。ここで大切なのは、最近声を大きくして言ってるんだけど、もう「地方」という言葉を使うのはやめよう、ということ。地方って、もともと「じかた」って読むんです。「まちかた」の対立項が地方なんです。町方は流通の場所で、地方が生産の場所です。

単に物産を町に送り込むだけじゃなしに、人材も送ってました。つまり農家の次男が町に出て、農家の100の仕事の内の得意な一つをやる。今度は商業、商いを始める。養蚕業や鶏肉屋、牛乳屋を始めるなど、次男以下は町で一つずつ商売化していったわけです。

ところが明治の資本主義と共に大資本が出てくる。鶏をさばくのの一つとっても、大資本で大きなファームを作り一つの事業にしてしまった。そうすると材料代の安さや人の集めやすさで農村は絶対に負けてしまう。こうして資本家が、農家がやっていたことを一つずつ専門化していく。

それで、昭和の初めに柳田国男が述べたとおり、生産がどんどん単純化していった。つまりお米と麦ぐらいになっていった。最終的には米だけになるというふうに、産業が単純化していく。これが農村の疲弊の一大原因だと柳田はいった。僕たちの今の目から見ると、その資本が農村で行われた多様な仕事をナショナルレベルで、事業化していったのみならず、次は農作までとっていったことがわかる。つまり戦後の高度成長期以降は、ナショナルレベル・インターナショナルレベルまでいった自動車産業や鉄鋼の下請けを、労賃の安い東北などで行う、いわゆる「城下町」をつくった。そうして農村は、単純化

していった農産さえ奪われたわけです。多くがその巨大な工場労働者になって。いわゆる今で言う地方が単業化していったわけです。

手でやる仕事、複数の仕事、そんなものも全部無くなった。そしたら普段の手が必要なお仕事は代わりに福祉サービスで税金を払ってやるというかたちになった。それで潤ったのは好況のときだけ、一時的です。グローバル化のなかでナショナルな企業がインターナショナルな競争にさらされるようになってくると、当然、労賃高いな、中国の方が安いな、中国の人情費が高くなってきたから次はオーストラリア、というふうに、結局町や農村を一つずつつぶしていったわけです。地域にとって単業になるということは、危ないことなんです。

命に近い仕事は金がかからない

「命に近い仕事は金がかからない」の意味を広げていくと、地域の豊かさは単業でないということになる。いろんな仕事在那里で成り立っているというのが、その地域が疲弊しないために一番大事なことです。

こんなふうに町をかえてしまったんやから、ちょっと責任とりますっていうのは、企業は絶対にしません。最後には何もなくなる。それを組み立て直すには、どれだけ時間がかかるのか……。それを考えたら、企業は結局捨てるを得ない。

そういう形で地方のコミュニティがつぶれていった。じゃあ都会はOKかという、東京が一番やばいわけです。

東京が一番極端、一強といって、地方は疲弊してきていると言うけど、マテリアルフロー、つまり仏師やエネルギーの流通具合を見たら東京が一番やばい。何か起これば電気は来ない、水は買えない、食べ物も東京で賄えない。完全にインターナショナルな流通の中にぶら下がっている。流通システムが災害や戦争で切れてしまったら、電車で2時間の距離は歩いては帰れないし、コンビニに行っても棚に何もなくて、停電が続くし、そう考えたら東京が一番非自立的な、完全外部依存型の都市なんです。数日すらしのげないでしょう。地方は疲弊してるけど、田んぼや畑に行けばちょっとくらい食べ物はあるし、まだしのげる。

(次号に続く(ミシマ社 『ちゃぶ台 vol2』より))

元気にしてますか？

休校になって2週間近くが経とうとしています。体調はいかがですか？自律した生活を送れていますか？ぐうたら生活も飽き飽きではないですか？「こうしよう」と思ったことの半分も出来ない日々は、なかなかつらいものですが、試行錯誤を繰り返しながらぼちぼちまいりましょう。「まずは三日坊主を目指す」のもスタートの大きな目標です。

人間は1人で生きているわけではないので、誰かのお役に立てることも大事なことです。本も沢山読んでね。18日の教科書購入の際には、図書館で本も沢山借りてね。

最近心に残った言葉。

「自分自身を助ける最良の方法は他人を助けること。他人を助ける最高の方法は自分の仕事に専念すること。」
深〜い。エルバート・ノバートさんの言葉。
みんなのいない学校は、さみしいです。会いたいね。